



平成 28 年 7 月 22 日  
第 282 号  
清野新聞社

オホーツクサイクリング

220 km 体験記(修)

インターナショナルオホーツクサイクリングはオホーツク海沿岸の雄武町から斜里町まで九つの市町、200 km 以上を片道で走る大会で、今年で35回目となります。私の出身地湧別町がほぼ中間地点でもあり、今回、訳あって初出場することにしました。

七月一日(金)、雄武町へ

五時過ぎに送迎バスでスタート

地点の雄武町へ着。会場では既に開会式などの歓迎イベントが始

まっております。初出場の私にとつては、まず状況把握が重要でした。地元から豪華なカニ汁や焼き肉が無料で振る舞われ、生ビールだけ購入するとお腹が一杯になりました。宿泊は近くの中学校の体育館にシユラフで雑魚寝。難民キャンプのようですが、寮生活や山登り経験のある私



七月二日(土) 雄武町出発  
北海道の朝は早く三時過

には慣れた環境です。様々な人がいて酒盛りが始まりましたが、翌日から本走が始まるので早々に就寝しました。

には慣れた環境です。様々な人がいて酒盛りが始まりましたが、翌日から本走が始まるので早々に就寝しました。

道の駅「愛ランド湧別」



難民キャンプのような体育館



は今年初めて組み込まれたというワツカ原生花園で誘導員がコース間違い。私はとっさに気づき、誘導員に追

はアイスクリームの差し入れがあり、参加者内で美味しいと評判になっていました。第五回目の休憩地キマネツプキャンプ場までは天気も最高だったのですが、ここからが実は大変な状況になってきました。

ぎにはほとんどの方が起きだして準備が始まります。孫のお遊びマツトを借りて背中(床)に敷いたのが快適で熟睡できました。天気は北海道らしく爽やか。朝食、着替え、バイクの最終点検を行います。スタート地点に集合。今回の大会参加者は八〇〇名弱、走行時間や順位を競う大会ではないのですが、やはり初参加は緊張します。七時半スタート、私はゼッケン287番、第一梯団の6グループです。一グループが50〜70人で指導員を先頭に併走、スピードは時速25 km 以下の超スローペースに正直ホッとしました。道の駅「おこっぺ」で第一回目の休憩。

は上位3割以内に入るとかかってに判断しました。危険な追い抜きを避けるため、以降のスタートはグループ先導者から十番以内としました。紋別の急坂を必死で登りオホーツク流水公園が第二回目の休憩地。第三回目休憩と昼食のコムケ湖キャンプ場からは、私にとつてほぼ土地勘のある圏域です。第四回目の休憩地道の駅「愛ランド湧別」は全コースのほぼ中間地点、湧別



日本ロードバイク協会  
オートバイサイクリング2016 7.1(土)・2(日)・3(日)

いついてこの道は行き止まりと指摘したのですが、前のグループはかなり先を行っているのどうしようもないとのこと。結局新しくできた橋まで行ったところで、さすがにおかしいと停車した集団に追いつきました。私は地元出身、サロマ湖は開口部がありこの道は行き止まりと説明して、ようやく引き返すことになりました。さらに悪いことには、この頃から土砂降りで暗くなり視界不良、細いタイヤに溝がないロードバイクでは、砂丘の狭い急傾斜道の砂、葉っぱ、雨で滑りやすくなり、前輪ブレーキが使えないためにこの上ない危険な状態に緊張しました。結局十キロ以上オーバーランし、初日のゴール常呂カーリングホールに飛び込みました。

会場では歓迎イベントが始まっていたのですが、ずぶ濡れでそれどころではありません。馴染みの鶴雅リゾートホテル行きのバスがあったので着替えを持って飛び乗り、温泉に入っで一息つきました。ところが運の悪いことは、続くもので、風呂上がりビールを楽しみに会場に戻るとイベントは終了し食事(売店)も終わっていました。トホホホ！です。幸い妻が差し入れてくれた羊羹があつたので、これで我慢することになりました。ところが悪い事態はさらに続くものです。夜中に大雨と暴風が体育館の屋根に響き、数百人分の泥まみれ汗まみれの濡れた干しもの(ウェア)は臭いなんの、最悪は夜半に地震でもあったのかと目が覚めました。地震のようなイビキをかく大男が頭合わせで寝ており、私は頭足を入れ替え、ブランデーの小瓶があつたので一気に飲んで寝ることができましたが、周辺は騒然となり、翌朝当人はかなり白い目で睨まれていたようです。

七月二日(日) 斜里のゴール

暴風雨は通り過ぎたようですが微妙な空模様で、靴やウェアは一晩では乾かず濡れたまま。防寒のベストとメガネの雨よけ



能取湖のサイクリング道路 (湧網線跡)



に帽子を着用しました。バイクは泥だらけで前輪ブレーキはやはり砂や小石を噛んでおり異音の原因が判明、タイヤを一旦外して清掃し、チェーンやギヤ周辺も

洗って注油したところ回復しました。高校時代のオートバイ通学の経験と技術が役立ちました。出発すると天気は徐々に回復してきて、ウェアも靴も完全に乾き、むしろ暑くなってきました。常呂から網走までは旧湧網線の廃線跡がサイクリング専用道路となっており、勾配も少なく快適でした。廃線前の車窓を記憶している私には懐かしい景色でした。第七休憩所は網走市内オホツク振興局で、東京農大のチアガールや応援団(大根踊り)の声援が待っていました。網走市内で初めての信号待ちに、はたと気がつきました。ここま

指導員と完走の握手



で約170kmも走ったことになり、もちろん信号

は沢山ありましたが、全ての信号に警官が立会って我々のために信号を調整してくれていたことに改めて感謝と感動でした。ここからは比較的広い歩道上を走ることになりましたが、数多い段差がお尻にひびき、かなりツライ状況になってきました。お尻の皮はトレイニングでは鍛えようがありません。下り坂で腰を浮かし何とかラストランまで頑張ろうと必死でした。小清水原生花園は様々な花園が広がっていて素晴らしい景色です。第八休憩所の道の駅「はなやか小清水」では蜂蜜ドリンクが人気で人だかり。ここま

で来ると最終ゴールが目前となり、皆の表情も明るくなってきました。特に小清水から斜里の農道は景観も素晴らしく、実に北海道らしく走りやすいコースでした。十二時半、ゴールの斜里町に着きました。コース間違いもありメータの走行距離は220km以上でした。我が故郷ながらやはり北海道は広く走りごたえがありました。地元の差し入れや沿道の声援にも元気づけられ感謝です。ゴール後に完走証を受け取り、昨夜飲み損ねた生ビールが最高でした。